

## サンドリの冊子(2)

写真は東日本大震災避難者の会（Thanks & Dream =サンドリ）2016年3月11日発行の冊子である。2017年3月11日発行の『3.11 避難者の声～当事者自身がアーカイブ』に続いて紹介したい。まずは、きれいな表紙の冊子の成り立ちから。

この冊子はもともと、2015年9月2～30日にロンドンで「福島第一原発事故の影響で苦しむ方々に寄り添って」開催された『red kimono』というアート・イベントの一部として制作された。『red kimono』の主旨は、国籍、人種、文化的背景、年齢、性別等の枠を超え誰にでも無差別に降りかかる放射能というものについて考えてもらうこと。その展示会場を訪れた人々に配布するため作成されたのが、福島母子避難者達のスピーチ、手紙、避難手記、そして福島で暮らしている50人の被災者の短いコメントをまとめた小冊子『red kimono』。



その後、同年11月21日～23日、広島で開かれた世界核被害者フォーラムでは、コメントを除いて冊子にまとめ、主に海外からの参加者に配布した。このたびは、国内外を問わず広く世界の人々に福島の実情を伝えるために、執筆者である3人の母子避難者の日本語（原文）も掲載。

写真の冊子は、国連防災世界会議（2015年3月14日～18日）の一部として開かれたパブリック・フォーラムでのスピーチ「世界のみなさん、助けてください」、安倍晋三首相と内堀雅雄・福島県知事、井戸敏三・兵庫県知事への手紙、「母子避難の記憶」と「旅」と題した手記から構成されている。

森松明希子さんとM.K.さんの手記は、2011年3月11日の東日本大震災、そのあとの原発事故の恐怖、子どもの命と健康を第一に、母子が福島から点々と避難する様子が克明に描かれている。こころに迫る避難者による手記・ルポである。引き込まれるように、一気に読みすすんだ。

原発事故のあと、残念ながら福島県外避難者に対して言われなき中傷が絶えなかった。最近とくに「福島差別」論という名のもとに、県外避難者への風当たりがより強まっているようだ。この「福島差別」論なるものについては、またレポートに書きたい。

先日、福島原発事故の現地を歩き、見えない放射線の恐ろしさを実感し、県外避難の皆さんらの「気持ち」も私なりに理解できた。大阪に戻り、この冊子を読んで、さらに理解が深まった。森松明希子さんの安倍首相・内堀知事への手紙、M.K.さんの手記「旅」の一部だけを紹介したい。

「そもそも、避難するという選択肢を選び、安心して避難を続けるという道筋が立てられる制度もなく、避難したくてもできない世帯があることを福島県や国はわかった上でのこれまでのこの4年間のご対応なのではないでしょうか。もしもご存知ないのでしたら、それは、「声なき声」、生活者の視点、ふつうの暮らしをしている人々の思いや声を聞き漏らしていることにほかならず、大変な無礼を承知の上で申し上げますが、為政者としては致命的であると言っても過言で無いと思うのです。

原発事故子ども被災者支援法という法律はあるのにずっと棚晒しの現状…。法律があっても、実際の被災者は何ら救済されないというこの現実…。

私は、福島にとどまり日々放射線と向き合う暮らしを余儀なくされていらっしゃる方々の選択をとやかく申し上げたことは一度もありません。むしろ、子どもを育てる同じ親としてのお立場の方々を思うにつけ、心中、心よりお察し申し上げます次第です。

一方で、避難という選択をした私たちもまた、紛れも無く福島県民であることに変わりありません。遠く離れた土地に幼子と避難をしていたとしても、福島が、3.11 前の何の健康被害のリスクも不安もない状態にもどりさえするのなら、すなわち、3.11 前には現存しなかった放射線がなくなり 3.11 前の福島でありさえするのなら、今すぐにでも家族揃って福島での生活をまた再開したいと心から願っているのです。そう願い続けて4年の歳月が流れました。」

「この福島という土地で暮らす人々、この土地から逃げた人々との間には分断が起きているのも事実です。健康被害を懸念して避難した人、汚染と向き合って地元に残ると決めた人、皆それぞれです。避難すると決めても残ると決めても、それぞれにメリット、デメリットがありどちらが正しいとか間違っているなどと、ただ単純に決められることではありません。どちらにしても、親が子を思い、心配し、決めた決断。それこそが正しい選択なのだと思います。周りがそれをどうこう言えるものではありません。親としての責任をどう果たすべきか、最終的には個人の判断だと私は思います。

私はたとえ家族が離れ離れになっても、避難するという選択をしました。これが正しい判断だったのか、これまでずっと悩んできました。しかしつい最近、避難を決意した自分の判断が正しかったと思える出来事がありました。大阪に引っ越してきたばかりのころ、息子は健康診断を受けました。その時はいくつかの異常が見られ、大変ショックだった私は息子が寝た後に別の部屋で毎晩泣いていました。ところが最近受けた健康診断ではかなり改善されており、健康回復への希望が湧きました。これまで、いろいろ辛い思いをしてきましたが、この2年間自分の決断を貫いてきて揺らぐことなくここまでこれたことは本当に良かったなあと、やっと思うことができました。」

(2018年7月5日)